

驚悲亂りに起るはごうぢや

ど、驚悲亂りに起るとは、吃驚仰天する心、悲しむ心、あはてる心の事ぢや。これ等の念が生ずると、戦争は敗北ぢや。白旗たて、降参する外はない。これは一體ごうぢや。

武士に主心の定まらぬゆる

自分の心が、ちやんと定まつて居ないからかであるわい。そこで、

主心定まる修行ぢや

主心が、ちやんと定まるやうに骨を折て修行しなければならぬぞ。其の修行でも尋常昔より今まに至るまで

弓は鎮西八郎殿よ、鎗は眞田よ太刀打や九郎

なぞと、頭から數へ出すが、縦ひ八郎でも九郎でも、眞田でも、又た

縦ひ此等を欺く人も

義経や、爲朝や、幸村よりも腕の勝れた人が何程出て來ても

主のこゝ際の先途の時に

さア、ぬきさしならぬところ、即ち、こゝ際のところに至つては、鼠錢筒に入つて技すでに窮まつた時、

主心なければ腰ぬける

本分心が定まらねば、たちろぐぞ。さア主心とは何んなものぢや。本分とは何んな

ものぢや。といへば、止至善の三字ぢやい。「大學之道、在明、明德、在親、民、在止至善、」ぢや

主心至善一つはないぞ、常に正しき此心

右の大學の三綱領、即ち、明德、親民、至善とあるが、無二無三ぞ。それが常に正しいとは何うぢや。さア仕うぢや〜。

唐の大和の物知よりは、主心定まる人がよい

唐の大和のは、世界ぢうのことぢや。日月の照すところ、舟車の通すところ、霜露の墜るところ、其中に如何なる識者があらうとも、主心定まる人がよいぢや。本分の定まつた人にこすものは無いぞ。骨折れ、骨折れ。修行が第一ぢや。

武士を絹布で食はせておくは

食はせておく、は大事にしておくことぢや。可愛いがつておくことぢや。

主の専途の一こ小ぐち

主の専途ぢやから、絶體理地の大事の場ぞ。本分上ぢや。このギリ〜骨頂の大事の場で、眼をひらかせんが爲めぢや。其處で

多藝多能も先づさしおいて

種々雑多の、限りない差別をさしおいて本分上に足をどめぬことには、ごうもならぬわい。

主心定まる場所を知れ

そりや、白隠さんもさう云ふて御座るぢやないかの。絶體理地の本分を確かに知らねば、何んの役にも立たぬ。眞田でも、九郎でも、鎮西八郎などが、何百萬、何千萬

出で来ても、鼯の尻にも劣るぞよ。こゝが最も大事な場所ぢやぞ。心經の中にも、釋迦如來が、

般若波羅密多是大神咒是大明咒是无上咒是无等々咒

と云ふて御座る。即ち、般若波羅密多は大智慧到彼岸の心法で、絶體理地ぢや。本分上ぢや。従つて、この般若の功德は、海より深く、山よりも高く、天地一杯ぢや。そして、能く、一切の不善の法を除いて、能く一切の善法を與ふるので、大神咒といふてあるのぢや。又、

この咒よく人をして老病死を離れしめ、よく衆生をして大乘に立てしめ、よく行者をして一切衆生の中に最大ならしむ。この故に、大咒といふ。よく、かくの如く利益す、故に名づけて無上となし、諸の佛法を無等と名づく。般若波羅密は、佛を得るの因縁なるが故に無等々といひ、佛を無等と名づく。是れ般若の咒術は佛の所作なるが故に無等々咒と名づく。

と、誰れやらも親切に説いてゐる。實際ぢや。釋迦如來は恚く有難いことを云つた上にも、更に「能除一切苦眞實不虛」といふて御座る。能く一切の苦を除く、眞實にして虚ならず、ほんごぢやぞ、うそぢやないぞ、決して嘘ぢやないぞと、だめを押し御座るのぢや。…限りない差別は先づさしおいて、主心定まる場所を知れ、絶體理地の大事の場を確かに知れよ。嘘ぢやないぞ。本當ぢやぞ。

主心至善も定まるごきは

主心至善、即ち、本分を、手丈夫に捉まへたならばぢや。

持齋持戒も外にやない

八關齋、所謂、八億の門をとざし、八ヶ條の惡を關絶してしまふことだとか、或ひは種々の戒を護持することなども外では無い、皆な此事ぢや。

有難いぞや主心の徳は、太刀や劍の刃もたゝぬ

本分上の、實際理地のところには、太刀や劍の刃もたゝぬ。一塵をも立せぬ。入りどころがない。一性泯然ぢや、ゑーいッ、恁ういふさるのも、まごろこしいわい。届かぬぢやもの。

弓も鐵砲も届かぬからに、敵ご云ふ字は更にない

喋舌つても届かぬ。弓でも届かぬ鐵砲でも届かぬ。大砲でも、水雷でも、飛行機でも、自動車でも、千里眼でも、手品使ひでも、何んでも届かぬ。釋迦が来ようが、達摩が来ようが、一切、届かぬ、届かぬ。此の廣い世界に、兎の毛一本もない。東海道に人ツ子一人も居らぬ場に到り得て見よ。何にも届かぬ處に行つて見よ。敵ごいふ字は更にないのぢや。絶對ぢや。寸絲をかけずぢや。そして相即ぢや。即の字、骨を

折つて見よ。

空も月日も海山かけて、土も草木も皆な主心

太陽も、月も、星も、雲も、霞も、霧も、雨も、雪も、風も、山河大地の其儘が悉く皆な主心ぢや。其の差別の儘が、絶體理地ならぬはなし。昔、白隠さんの居士に、山梨平四郎といふ熱心な男が居たげな、日夜兀座して遂ひに前後を截斷し、身心脱落して大死一番入静なり、天明に及んで忽然と蘇生し、看じ来れば、天地一指、萬物一馬、上に片瓦の頭を蓋ふことなく、下に寸土の足を卓するなし。此外、何んの禪道、佛法かあらんとて、覺えず呵々大笑した。それから肩輿といふものに乗つて、薩埵峠を越す時、はじめて草木國土悉皆成佛といふことを徹見したさうぢやが、骨を折つて坐ると、誰れでも、此の、草木國土、猫に杓子と千差萬別の上が直ちに絶對本分のところぢやと、徹見することが出来るのぢや。

神ごまり高まが原も、五慾三毒ないところ

高まは高天の約、原は廣き義、此の國土から日神の御座するところを稱する語ぢや五欲とは、色、聲、香、味、觸。三毒は、貪、嗔、癡。そこで、天地萬物の上が、直に絶體理地の本分の端的ぢやと徹見したならば、五欲も三毒も、五欲三毒でなくなるのぢや。柳は緑を失し、花は紅を失す。天が天でなく、地が地でない。男が男でなく女が女でない。

民を新たにすることは云へど、至善定まるまでのこと

こゝが佛教の言葉でいふと、自覺、覺他、覺行圓滿するところぢや。自覺とは大學の謂ゆる「在明明德」ぢや。覺他とは「在新民」ぢや。覺行圓滿とは「在止至善」ぢや。過去久遠劫から、人々本具の明德、即ち、絶體理地を明かにしたら、四弘

の願輪に鞭ちて、衆生を化度せねばならぬ。これが、所謂、民を新たにする處、又た此の正念が、いつまでも、いつまでも相續するのを至善定まるまでの事と云ふてあるのぢや。

出家も沙門も高位も知者も

何んな大官でも、お智識でもぢや。

主心なければ皆な民ぢや

本分心なくば、下等も下等も、最下等の漢ぢや。愚迷の凡夫ぢや。可哀さうなものぢやわい。

宮はわらやよわらやは宮よ、主心一つが潮ざかひ

何んな大宮殿も、茅屋と同じ。茅屋が直に大宮殿よ。御自身の足が、本分の上に居

さへすれば、九尺二間の裏棚も、金殿玉樓で御座るぞえ。九尺二間はまだおろか。一
 裘一褐、破れ草鞋に身をのせて、鉢盂々々叫んで托鉢してる其儘の身が、大千世界と
 同大で、餘す、缺ぐるも御座らねば、何んな立派な宮殿も、何んな穢い茅屋も、お腹
 の皮の一皺ぞや。寸絲をかけずちや。絶對貧のギリ／＼ちや。唯だ本分上に居ると居
 ないが、潮さかひちや。

上下萬民主心があらば

上も下も一切の衆生が、本分心さへうしなはぬならばちや。

治めざれども世は萬歳

警察署も、裁判所も、監獄も、兵隊さんも、軍艦も、大砲も、鐵砲も要らぬ。治め
 ざれども世は萬々歳ちや。天下太平ちや。不老不死ちや。無病息災、家内圓滿ちや。

嬉し目出度や主心の徳で、うため隻手の聲も聞く

此んな風に本分心を得て正念相續してゐたならばちや。打たぬ隻手の聲も聞こえる。
 足なくして起つことも出来る。口を蓋ふて喋舌することも出来る。居ながらにして千里
 向ふの燈火も吹き消すことが出来る。富士山を礎として唐天竺のはてまでも抛り飛ば
 すことも出来る。自ら悟りの眼が開いて來るのちや。

悟り迷ひを口には説けご、主心居らにや何ちややら

迷ひごか悟りごか、凡夫ごか佛ごか、いろ／＼と口では説くけれど、主心本分のす
 わり處がないと、藁人形、案山子、しん粉細工と相去ることいくばくぞや。猛省せよ。

袈裟や衣で見かけがよいが、主心すわらにやひよんなもの

七條九條の袈裟かけて、見かけはいかさま立派でも、主心すわらにやひよんなもの

ぢや。とんだ奴ぢや。デモ坊主ぢや。袈裟賊ぢや。狐加狸の化ものよ。

四國西國めぐるもよいが、主心なければむだ道よ

四國八十八ヶ所ぢやとか、西國三十三ヶ所とか云ふて參詣る者も多いがの、是等の徒が、たとひ百萬べん參詣つたとして、主心なければむだ道ぢや。方角ちがひぢや。御巡禮衆、脚下が危い。そりや危い。一歩づゝに消えて行くぢやないか。これ、何故、家に歸らぬかや。何故、本分の家郷に頭を回らさぬかや。

主心丹田氣海にみつりや、仙家長者の丹薬よ

本分心が、臍から二丁下の氣海丹田に満つればぢや。長者や仙人のやうに、千萬歳もながいきをすることが出来る。得がたい妙薬となるぞよ。併しなア氣海丹田が臍から二丁下ぢやと云ふと、世間の人は直ぐと下腹のことばかりぢやと心得る。大間

違ひぢや。臍下ごころか全身のことぢや。頭のギリ／＼から踵のはてまでぢや。隙間の無いのか丹田ぢや。佛魔が來つて窺へども入る隙間がない。否や、窺ふことすらも得ぬ。丹はタンぢや。單一ぢや。絶體ぢや。生もない、死もない。本分心は過去久遠劫から此の丹田にみちて居るのぢやが、たい氣がつかぬばかりよ。これに氣がついたら、即ち、氣が満ちて來たら、其時即刻、不老不死の丹薬ぢや。四國西國を巡ぐるまでもない。先づ御自身の四國西國を何う巡らさるか。

丹を鍊るには鍋釜いらぬ、元氣丹田にすわるまで

丹のねり薬はなア、越中富山のはんごん丹や、伊勢のあさまの萬金丹のやうに、鍋釜は要らぬぞよ。唯だ單にぢや。無雜に本分の大元氣を、臍下二丁の氣海丹田に満ちとほせばよいのぢや。氣をつけとほしたらよいのぢやわい。これが謂ゆる不老不死の沙汰を離れた大丹薬ぢや。

不死の丹薬望みな人は、つねに氣海に氣をおけよ

さア、こんな不老の丹薬は欲しくはないか。若しも欲しかったら、常に氣海丹田に氣を満たしておけよ。

虚空界より長壽のものは、氣海丹田に住む主心

虚空界よりも、もつと長いきものは何んぢやらう。御自身の氣海丹田にすむで居る本分心ぢや。絶體理地ぢやわい。

氣海丹田に主心が住めば、四百四病も皆な消ゆる

本分心が、ちやんと定まれば、四百四病は自ら消えてしまふぞ。煩惱妄想でなくなる。又、無病の病も亡せてしまふ。然るにぢや、主心が定まらねば、兎角、空風火水地に缺くるところが出来て、いろ／＼の病に罹るのぢや。煩惱だらけ、妄想だらけ、

神経病ぢや。夫婦喧嘩ぢや。人殺ぢや。警察署の厄介者ぢや。定がなければ散亂ぢや。和合が無ければ天下亂れて麻の如しぢや。可恐し。

主心お婆々はいくつになりやる、わしは虚空におないごし

そんなら、不老不死の本分心のお婆さんは、一體いくつになりやつたぞえ。はいくわたりや虚空と同年ぢやわいの。

虚空おやぢは死にやろご儘よ、わたしやいつでも此通り

おや、婆さんさうかい。心配しやんすな、わしはいつでも此通り、ハツハ、。

山河大地を我子にもてば、わしに不足な事はない

さうぢや、お婆さんもうれしかろ、この柏樹爺もうれしいわい。山河大地草木禽獸一つとして親不孝な子供はない。春になりや花といふ子が咲いて見る。鳥や蟲けらが

鳴いたり飛んだりして見せる。夏になればや太陽といふ子が照りつけてくれる。蟬が鳴てくれる。涼しい風が吹いてくれる。秋になればや蟲といふ子が唄つてきかせる。四方の眺めは紅葉してくれる。冬になると雪が降つてくれる。寒い風が吹いて冬らしく思はしてくる。世界恣に廣濶。何に因つてか鐘聲裏に七條を披す。天地萬物みな鐘聲裏に七條を披せざるはなし。あゝ主心お婆さんや、しあはせぢやのう。嬉しいのう。オ、侍者か、お茶もつて来てくれたのか。そりやく……。

武士の身の上は覺悟がおもぢや

軍人や武士ばかりぢやない。如何なる人でも覺悟といふことが大事ぢやぞや。覺悟は、即ち、決定心ぢや。金剛心ぢや。岩をも透す一念ぢや。不動心ぢや。(造次急遽苟直之時、顛沛傾覆流離之際、蓋君子之不_レ去_ニ乎仁_一如此、不但富貴貧賤取舍之間而已也) 銀山鐵壁、萬里一條の鐵、出身の一路はこゝから見出される。鼠竈筒に入つて再

びをどり出す妙技も、猫を咬む勇氣もこゝから生まれて来る。若しも、この決定心を軍人武士から取り去つて見よ。腰ぬけ武士ぢやわい。白旗をたて、降参するのみぢや。若しも、此の決定心を、政治家から取り去つて見よ。腰ぬけ政治家ぢや。何時も失政問題とか何とか騒がれて、遂には政治界から葬られて終ふぢや。若しも、商人から此の決定心を奪ひ去つて見よ。あれにせうか、これにせうかと頭をひねつて居る間に大損害。店しまひぢや。夜逃げぢや。實に「覺悟」は、御自身を守る神佛ぢやぞよ。

生きて一たび死ぬがよい

生まれたら一遍は死なねばならぬ。それが當然ぢや。生まれたら死ぬ、生まれたら死ぬ。然らば即ち今ま仕う死ぬか。大死一番底作麼生。

生きて死ぬるはたやすい事よ、主心お婆々に出逢ふてこへ

生きて死ぬのはたやすいことぢや。それはなア、先づ己れの本分心のお婆さんに出逢ふて問ふのが一番よい。何故ならば、人が幾ら何んと云ふて教へて呉れても、人の身体で生き死にする譯ぢやない。己れ自らの生死のきづなを截断して見ねば、萬劫を経れども知れずぢやからよ、念々の生死、一呼一吸の生死、さアこの生死のきづなを仕う截るか。

主の御恩で仕立たからだ、喧嘩なごする不覺者

さア此の身体は何うぢや。絶體理地の本分から仕立たからだぢや。それが喧嘩すりや仕うした。差別に落つるわいの。大まぢがひぢやわいの。

武士は臆病も忠義の一つ

喧嘩なごする不覺者なご云ふと、いかにも臆病ものやうぢやが、忠の一つは、

喧嘩の心、泯然たらしむる。没して終ふぞ。自他の隔歴、差別がない。相手がなければ外へちらさぬ此の心、外へ散つたら、犬武士ぢや。二心あるやうぢや。差別の世界へまづさかさま。そこで「武士は臆病」の「臆」の字、味はつて知れよ。胸のうちは何うぢや。

一度主君に上げ置くからだ、我身ながらも自由にならぬ

一度び本分上から出たことには、此のからだは既に本分の絶體理地へ上げ置くからだぢや。私と名はついてても、私の自由にならぬからだぢや。「私」でないものを私といふまでぢや。女でないものを女といふまでぢや。男でないものを男といふまでぢや。

大事くご守りませう

一歩でも、一またゝぎでも、一舉手一投足、くさめ一つするでも、大事にく守り

まあ坐われ

一九四

ませう。綿々密々に油をそ、いで洩らさすといふ風に守らにやならぬ。

内證つき合ひ傍輩同士にや、狗も云ふことも腹立つな。

犬も云ふことも腹立つな、猫といふことも腹立つな、鼯といふことも腹立つな、何んぞ云ふとも腹立つな。呼ぶにまかせて居らしやれよ。我れと名はついても我れの自由になるものでないぞや。我れが我れでない。花が花でない。鳥が鳥でない、今日の上が皆な夢ぢやわやい。

主の爲めなら無間の底も、修羅も紅蓮も辭退せぬ

無間は奈落のどん底ぢや。三十六地獄ぢや。この地獄のどん底で苦を受くるとも、修羅でも紅蓮の焰の中でも、エーイツ斷じていとやせぬわい。

命限りに切り込む所存、是れが勇士の常の住

いのち掛けで、きり込めつき込め、いやサ、本分上に居て働くならば、生死の沙汰は更にないぞ。無縁の大慈大悲心といふ駒に鞭ち、慕向立破り、車切り、當るに任して切り伏せ、縦横無盡に戦ふのが、之が本分勇士の常住の場ぢや。太平記の中に「長崎次郎高重最後合戦の事」といふ一節がある。高重は兎鷄といふ坂東一の名馬に跨り崇壽寺に至り、長老南山和尚に参じて、問ふて曰く、「如何なるか是れ勇士恁麼の事」和尚答へて曰く「吹毛劍急に用ゐて前まんには如かず」と。高重此の一句を聞きて問訊して馬引寄せ打ち乗りて、百五十騎の兵を前後に相隨へ、笠符かなぐり棄て、閑に馬を歩ませて、敵陣に紛れ入り、さんぐと切まくつたといふことがある。武士でも高重ぐらゐな働きがなくては駄目ぢや。即今、無邊の衆生を如何にして愚迷の魔軍中より救ひ出すか。即今、無盡の煩惱軍を如何にして截断するか。即今、無量の法門籌策を如何にして學ばんとするか。即今、無上の佛道平和を如何にして成せんとするか。一度び主君に上げおくからだぢや。これ程の忠を盡くさにやごもならぬわい。

主心お婆々はごころにござる、氣海丹田の裏店かりて

本分心のお婆さんはごころにござる。はいくわしはお前さんの氣海丹田の裏店をかりて居ります。

氣海丹田はごころの程ぞ、臍の辻から二町下

そんなら、氣海丹田はごの邊ぢやの、臍から二町下ぢやわいの。御自身の中心點ぢや。丹といふ字を、よくく見やれ、中の一點どりや丹でない、一點がタンぢや。主とよむぞ。いきの根たやして、見ぬことにや。「、」の姿が逃げ失せる。タン田ぢやない。雜田ぢや。散亂田になるぞ。

臍のぐるりに氣が聚まれば、ごりも直さず大還丹よ

臍のぐるりは全身ぢや。全身たこれ一氣ぢや。全身が唯だ一氣ならば、ごりも直

さず大還丹よ。不老不死の還丹ぢや。ぐるりもない、内部もない、生も死もない。相對を絶す。併しなア、祈が今、かう云ふたどて、還丹の味は、皆さんに判りやせぬ。一番大奮發して坐禪る氣は起らぬかいの。即今、還丹の大きさは何ぢや。即今、還丹の色は何うぢや。還丹を二三粒祈の掌中にのせて見よ。還丹は世界に幾粒あるか。何故、還丹といふか、還丹の歳はいくつぞ。還丹を飲んだ後は何うするか。何うしたら佛祖の意に叶ふか。これが知りたけれや、主心のお婆さんに逢出ふて問へぢや。

最もたふこや還丹の徳は、須彌も虚空も碎けて微塵

まことに此の上もない尊いげんたんの徳は、須彌山といふ世界に一番たかい山でも虚空でも、何んでも彼でも粉微塵に碎けてしまふぢや。還丹は。たんにかへるぢや。散亂心にならぬことぢや。定地ぢや。不定地なること無しぢや。こゝに至らば

十方法界實相無相、見られてもなく見ても無い

實相は直に無相ぢや。無相は直に實相ぢや。相手がない。手前がない。見られても無く見ても無い、行くもなければ歸るもない。動もなければ不動もない。貧乏もなければ富もない。併し、憍う、無い〜と云ふが、此の無いの端的は、何うちや。有相、無相に即して、有無相を打越えた處を見ておぢやれ。地獄天堂も昨日の夢よ。餓鬼修羅畜生も昨日の夢よ。美麗も醜惡も昨日の夢よ。

煩惱菩提のあともない

悟り迷ひのあとも無い。水鳥の行くもかへるもあまたへてぢや。

墮してくるしむ地獄もよいが、往いて樂しむ淨土もないぞ

おちて苦しむ地獄もないし、十萬億土に往いて樂しむ淨土もない。「去年貧有、雖無、

地、今年貧無、雖無、地」

こゝに一期の大事がござる、眞正得悟の智識に逢はにや

併しぢや、こゝに一大事がござるぞえ。それはなア、獨り悟つた積りでゐては、何んの役にもたぬ。ほんとうの、ほんたうの一點まちがひの無い悟りを得た、お師家さんに逢うてみぬことには何もならぬ。「畠中の水練」では、こゝはの先途の時に、徳利ぢや。グブ〜ぢや。箱庭禪ぢやから、雲を起し雨を降らし龍となつて天に上り、虎となつて巖石を裂く働きがない。

世間多少の修行者ごもが、一二十年難行苦行

彼方此方の、夥しい修行者ごもが、グツク〜と霜辛雪苦して修行を積んで

思ひはからずこの場に到りや

此場とは、**団地**一下の場ぢや。アツ、**成程**と、**自ら味**つて知つた**端的**ぢや。……**一體**の字は、**字書**にも見えぬなぞ云ふ者もあるがの、それは口で引くから見えぬのぢや力の部で見れや、直ぐわかる。字書に依ると、「**過**、**戸臥切音**和牽**船也**」とある。即ち船子が櫓をおし乍ら「エイ」と叫ぶと、陸の方で其船の綱を曳く者が「ホイ」と叫ぶといふ程のこと。併し支那の俗語では、「うしなつてるものを尋ねる時は見つからぬが尋ねも何もせぬ時、ひよいと見つかつた時」のことを**団地**一下といふてをる。さて、思はずも、アツ、**成程**といふ場にいたたりや、お**天狗**になつてのう。

もはや悟つた大ひまあいた。おらはこれから心の儘ぢや

なぞと云ふて、それはく**亂暴**するものも出る。一休のやうな**真似**をするものも出る。普化とか、**寒山拾得**を真似たり、**布袋**、**臨濟**、**徳山**を氣取つたり、**巖頭**、**雪峰**、**鴻山**、**雲門**のごと思ひくにその風を装ふたり、又

殺生偷盜も氣遣ひないぞ、五逆十悪好いなくさみよ

生きものを殺そうが、**泥棒**を働かうが構ふことは無い。父を殺し、母を殺し、佛身より血をいだし、**阿羅漢**を殺し、**和合僧**を破り、**殺生**、**偷盜**、**邪淫**、**妄語**、**綺語**、**惡口**、**兩舌**、**貪**、**瞋**、**癡**、**ごんな事**をして可いなくさみぢや。なご、**邪まな考**を起し、更に

因果むくひも無いからご

大悟底の人の爲すわざは、既に**是非善惡**、**因果應報**を打越えて居る。何うして報ひがあらうかと、**勝手**にきめて、**仕放題**なことをする者もあるぞよ。現に其處らへゴロくとして居る。何んといふたわけ者共ぢやい。それだから**袷**が常に云ふぢや。「**這の佛飯泥棒**め」ご。**袈裟**を着けた**油蟲**ぢや。**袈裟賊**ぢや**衣架飯囊**ぢや。一棒に打殺して狗

子に與ふれども、狗子も又た喫却せずだ。うろたへ者共が

邪見斷無の我儘悟り、よその見るめも恐しや

外道ごん、我儘悟りごん、何處を見て居らさるか。主心お婆はこちぢやぞえ。これ手の鳴る方へ向かense。エーイツ。脚下を見ないから邪見斷無の糞壺へ眞逆さま。何んど云ふさまぢや。わきから見ると恐しい。悟りぞこないすまいことぢや。

勵み求めて見性の法も、いまは地獄の種こなる

折角、骨を折つて自己の本性を見徹した法も、邪見斷無の見に陥つては、地獄のたねとなるばかりぢや。

もこの主人は皆な消えうせて、魔縁天狗が入りかはる

もこの本分まるつぶれ、悪魔天狗が入りかはる。雑念こもくぢや。八重葎しげれ

る宿のさびしきに人こそ見えね秋は來にけり。あれ果てた家に、主心お婆のすがたも見えず、いたづらに狐狸の栖家となつて、秋風蚤已叩扈來るぢや。

過去の因縁拙いゆるに

過ぎ去つた昔の因縁が拙かつた爲めに、見性したと云ふても歡喜が起らなかつた爲めに、肯心自許が不十分であつた爲めに、冷暖自知せず、こしよう丸のみ、お茶漬けを掻きこむやう細嚼せず、それが爲めに外道斷無の地獄へ墮ちたのであるわいの。粗餐はあき易い。腸胃が痛む。傳染病に罹るぞよ。公案も澤山數へたとて、消化すること知らねば駄目ぢや不消化ぢや。駄目ぢや。法眼圓明ならば。日々に斗金を費すも分外にあらず。偷心未だ死せざれば時に滴水をなむるも消化しがたしぢや。

終に眞正の明師に逢はにや、悟後の修行の奥儀も知らぬ

真正の御知識に逢はぬことには、悟つた後のことが分らぬ。この悟後の修行といふのが、まことに大切ぢや。大燈國師は京四條の橋下で、乞食の仲間入りをして二十年の長い間も修行された。「古人刻苦光明必盛大也、若人不信看取此老漢」ぢや。二十年とは云はさぬぞ。即今、唯今、御修行最中ぢや。釋迦如來でも、大迦葉でも、達摩も、六祖も、皆なせつせと御修行してござる。そりや、お前さんの前で關山國師が牛を牧してござるぢやないか。……悟後のことを知らぬならば、

もこの凡夫がいつそまし

あかのぼんぶが、いつそ増しぢや。

今は澆末法滅の時

世は末になつた。世態人情は櫻紙よりも薄い、酒に水を入れたやうぢや。相似の禪

ばかりはびこつて、正宗をくります常闇ぢや。佛法消滅の時ぢや。

邪見邪法の起るも道理

正見正法の裏となり行くも道理ぢや。

支竺扶桑の三國ともに、眞の禪宗は地に落ち果て、殊にあや

しき邪法がござる

支那、天竺、日本の三國ともに、眞實の禪宗は、最早や地に落ち果て、しまひ、却つて、あやしい邪法が出て來た。

曹洞黄檗濟家も共に、善知識ぢやこ呼ばるゝわろも

曹洞宗、黄檗宗、臨濟宗ともにぢや。大善智識と呼ばれて御座るお方でもぢや。

人に對する説法を聞けば

口まかせに、喋舌つて謂ゆる説法をして御座るのを聞けば、

眞正向上に禪法といふは、坐禪觀法に用事もないが、佛經祖録も更くいらぬ、木地の儘なら眞の佛

即ち向上てんきりの禪宗は、坐禪も、看話も、そんな事に用事はない。經文も、語録もいらぬ。唯だく木地の儘がよい。漆つけねば剥げ色も無い。其儘が佛ちやと云ふたり、又、

佛求むれや佛に迷ひ、法を求むれや法縛をうく

とも云ふてる。これが間違ひやすいのぢやわい。何故ならば、向ふからちや。手前も對手も無いのに、自ら手前と相手とを拵へて向ふからちやいの、求めるなよと仰しやいますが、何處に相手があるか。何處に手前があるか。向はぬからこそ、經文に向つてよんでも、語録に向つてよんでも、坐禪しても、起つても寝ても、漆つけても木

地の儘でも、有りて凡ゆる事にふれ、物にあふて七轉八倒してゐる其儘が寂然不動ぢや。それぢやのに、まだ恁麼ことをいふとる。

佛果菩提も夢中の夢よ、生死涅槃も飛ぶ鳥の跡、好きも悪きも皆な打ちすて、

と、矢張、向ふからちやわいの。佛果と菩提と、生死と涅槃と、好と悪と、これを皆な打ちすてるといふが、善知識ちやと呼ぶるゝわろも、打ちすてねばならぬ程やつかいものを背負つて御座るが、大きに骨が折れることぢやのう。

木地の白地で月日を送れ、障れや濁るぞ溪河の水

そりや、段々と窮屈になつて來た。木地の白地で月日を送れなら、手あかをつけても佛ぢやないぞ。塵が一つたかつても佛ぢやないぞ、五年十年たつと、大分、煤じむで來る、やれ月日のたつ處に居ては佛にやなれぬ。木地の白地で月日を送れと思ふた

時、そりや障つたぞ、濁つたぞ、垢がベツトリとついたぞ。これや何うしたもんぢやい。矢張、向ふからぢやわいの。

問ふな學ぶな手出をするな、是れがまことの禪法だほごに、見ぬが佛ぞ知らぬが神よ

問ふといふ相手がある。學ぶといふ相手がある。手出といふ相手がある。それをこぼひのを眞の禪法ぢやと思ふて居るから、さア、見ては佛になれぬ、目をふさがねばならぬ、知らぬが神ぢやから、耳を押さへ、鼻をふさぎ、口を蓋ひ、一切己れの心を起さぬやうにせねばならぬ。と御説法をするやうになる。何んといふうたへ方ぢやらう。向ひさへせねば、見るとか見ぬとか、知るとか知らぬとか、そんな者には頓着ないのぢやが、似而非智識の分際では、先づ此んなものぢやろかい。

是れを聞くより彼の大勢の、無智や懶惰の役座のやから、扱て

も貴い教化でござる

かゝる邪説を聞いた大勢の無智なもの、懶惰のやくざもの共が、やれ有難い御説教ぢやと云ふて、隨喜の涙をこぼし

もはや是れから我々ごもは、思ひ寄らざる生佛ぢやぞ

聴く者も聴く者ぢや、見聞にわたつて居るから、邪師の説く邪説を眞正ぢやと思ふて、思ひよらざる生佛ぢやと云ふとる。そんなら今迄死んだ佛とでも思つて居つたか。

食ふてはこして寝るばかりぢやと、並び睡るを脇より見れば、大勢並んで櫓を推すごごく、如何なり行く身の果てやらん

全體、食ふてご、食はれては何んなものか。寝てご、寝せられてごは何んなものか。並び睡るを脇から見ると、大勢ならんで櫓を推す如くごは、いかさま、旨い形容詞ぢ

や、ウロタへ者のさまは、皆な此通りぢや。

佛法破滅の大前表よ

恁麼てあひには、大法も何もあつたものでは無い。塊を逐ふ犬ぢや。陽炎を蹴つてまはる馬の子ぢや。飛んで火に入る夏蟲ぢや。邪師も邪師ぢやが、其の邪説を聞てありがたがる者も、有がたがる者ぢや。釋尊は是等の徒を、獅子身中の蟲ぢやと云ふてござる。それはなア、獅子のからだには何んな蟲でも寄りつくことさへもせぬが、獨り腹の中の蟲のみは獸の王ともいふ獅子を食ふて居る。外道でも何んでもぢや。佛法のそばへ寄りつくことすら出来ぬけれど、この佛法を破滅さすものは、皆な佛弟子共ぢや。邪學者共ぢや。獅子身中の蟲共ぢや。

悟後の修行とは何の様の事ぞ、
お婆々知つてならうたふてみやれ

前には悟後の修行の大事なことを云ふたがの、こゝでは云はぬぞ。全體、悟つた後ぢやの悟る前ぢやのといふ差別が、本分向上の上にあるかいの。……知るとか知らぬとか、うたふとか歌はぬとか、見るとか見ないとか、皆な「向ふ」から此んな妄想をかはぐのぢやわい。自分で勝手に相手を立て、置いて、自分勝手に其の相手に取つて廻されて居るのぢや。さア修行の上に、悟前とか悟後とかいふものがあつたら出して見よ。

是れは大事をお尋ねそふよ、
五百年來すたれた法ぢや

おやく、お婆さんが、めつさうなことを云ひ出した。元來。何が大事で、何が小事ぢや。五百年來すたれた法ぢやといふが、五百年以前の法とは何んなものか、何か珍らしいものでもあつたか。

諸禪智識も知らぬが多い

ワツハ、、、そんなら「知つた」といへば何んなもんぢやい。

悟後の大事は即ち菩提

たわけた事を仰しやるものかな。これ、悟前は菩提でないか。菩提は「悟つた後」といふもの、専有物か。大事のみが菩提で、小事は菩提でないか。ウロタへた事を云ふお婆さんではあるわい。僞主心婆々奴、三十棒をぶつ食はずぞ。白隠さん、あんなのなア御懸意な、主心お婆さんの云ふことは、ありや井戸端會議で夢語りするやうぢやわいの。

むかし春日の大神君の、解脱上人に御告げがござる、およそ俱盧孫佛より以來、たごひ天下の智者高僧も、菩提心なきや皆々魔道

解脱上人とは、釋貞慶といふて、尙書左丞貞憲の子ぢや。學年の頃に、興福寺の權僧正覺憲に師事して、十歳の時、剃髮受戒し、貞慶と名づけた。壽永の初め、維摩會の主座に陞り、文治二年に興福寺の住職となり、才智の譽をふるひて最勝講の詔を承はつた。然るに、上人は、頗る枯淡なお方で、資糧なども乏しく、従つて乗物僕のためにも、人に借りて其用を達して居たぐらるぢやから、講會の出仕も兎角をくれ勝ちである。其上、法衣の如きでも破れ目を縫ひあはせたやうなのを着てござるので、殿上に列坐してゐる多數の官人とか坊主どもが忍び笑をするのぢや。これを見て上人は、「見わたすところ、澤山の坊主どもが集まつてはゐるが、皆な時の浮誇にはせて佛法の制儀をも守らず、却つて其道に率ふものを嘲るか」と嘆き、講會が滿散するを俟ちて、山城の笠置寺に隠れてしまつた。時に二十九歳であつたげな。話がかはつて元暦の頃、後鳥羽上皇には鹿狩を好ませ給ふたけれど、昔の罪を懺悔いたされ、寺を建て、上人を召され、落慶供養を營ませられた。其時も上人は例の弊衣をつけ、破

笠を肩に懸け、草鞋ばきで宮中に参り、階の側でゆる／＼と草鞋を脱ぎ、杖と笠を置いて殿上に昇り、釋迦如來がはじめて鹿苑で法輪を轉じ給ふたことから鹿は轉法輪菩薩の三摩耶であること、又、春日大神の使獸であることなど、説法いたされると、君臣いづれも感嘆せぬはなかつたといふことぢや。さるほどに上人が春日の大神へ詣られた折、あまたの鹿が悉く上人の前に集まりて、前足を折つてつゝしみ、又、大神が上人にお告げになるには、「およそ拘留孫佛より以來、たとひ天下の智者高僧も、菩提心なきや皆々魔道」と。拘留孫佛とは、過去七佛の中、第四佛にあたるお方ぢや。併しなア春日の大神が恚う仰しやらずとも、又、拘留孫佛以來と區別をつけずとも、菩提心がなければ、智者でも無ければ高僧でも無いことは當然ぢや。

菩提心とは何うした事ぞ、やまん婆女郎も歌ふておいた、上求菩提ご下化衆生なり。

菩提心はなア、一休さんが作つておかれた、やまん婆遊女の謠本にはじまつた譯でもあるまいてのう。こんな「向ふ」と、即ちあひてを立てると、菩提心が逃げてしまふ。手づくりの上求菩提下化衆生になるわいの。有求の上求菩提、有化の下化衆生では、まだく佛祖の意にかなう段ではない。瞿塘をへだつ十二峰ぢや。そんなら、何うすれば手づくりでない上求菩提、下化衆生となるか。こゝで換骨脱體して來ねば駄目ぢやわい。

四弘の願輪に鞭打ちあて、人を助くる業をのみ

これも、矢張り「向ふ」から斯うなつて來る。四弘の願輪といふ相手をこさへるから、鞭つとか何んとかと有心のわざをするのぢや。手づくりの菩提心を以て、手づくりの「四弘の願輪」に鞭つものぢや。滓妄想共奴がッ。元來「菩提心」など云ふても、假に名字をたてたまでぢや。何處にそんなものが得られるかいの。實に不可得ぢや。

「無有念」ぢや。「無所念」ぢや。菩提に所念がい。それを僅かに念ふたら何うぢや。偽もく、ごんだ大偽ものぢやわい。

人を助くにや法施がおもちや、法施は萬行の上もりよ

そこで、唯だ正念をもつて二性を「布施却」するのぢや。善悪性を布施却し、有無性、愛憎性、空不空性、定不定性、淨不淨性を「布施却」し、一切悉く皆な施却せよ。「布施却底」こそ實に萬行の上もりぢや。

有がたいぞや法施の徳は、たごひ佛口も盡くされぬ

施却底の徳は、たごひ釋迦如來や彌勒菩薩が出て來て、不可思議辯才を以てしても盡くされぬのぢやわいの。「施却底」とは喃、さきも云ふたやうに二性を空じて本心性を徹見する、謂ゆる見性のことぢや。そこで

法施するには見性がおもちや、見性はかりぢやちぶさがほそ

といふてある。もうく他には何もない。唯だ見性するのぢや。見性をな。見性さへすれば、能事をはれりぢや。併しなア、大概のものが「見性」を一仕事にして居るから、兎角「見性」が別ものになるやうぢや。其んな弱いことで何うなるかい。幕地に萬事を放下し、諸縁を止め、唯だ一心不亂なれぢや。一心不亂ならば、其の當時が自己本性ぢやないか、此の見性を一仕事にしてをるやうな小さな乳房では、よい子ごころか、よい夫も持てまいぞ。そこで喃、もしも見性したならば、更に無量の法門を學び、乳房をふとくして、よい子供をこさへるぢや。

細い乳房ぢや子は出來ぬ、よい子なければ跡絶える

もつとももの事ぢや。絶體本分の上から生まれて来たよい子がないと何もならぬわい。

隻手音聲もこめ得て置いて、此で休すれや斷見外道

白隠さんの公案に「隻手音聲」といふのがある。ながの間、骨を折つて此の隻手音聲の公案を見て、自分は最早や悟つた、大閑あいたなぞと、獨りでおさまつて居ては却つて斷見外道ぢや。定見外道ぢや。實際に此んな考へをもつ者が多いぞよ。おきまゝりぢやから可笑いわい。つまり、最初から本分をはづれて「向ふ」から斯かる外道魔群の穴に陥るのぢやぞへ。

次ぎに千重の荆棘叢を、残る事なく皆な透過せよ

其處で喃、一千七百則の公案も、ありと凡ゆる差別の道理も何んの障礙物にならぬやうに、こなして本分圓通無礙にならねば駄目ぢや。そこで機關ぢやとか、法身ぢや

とか、言詮なごが、千重の荆棘叢(猿どりいばら)のやうにある。其のいばらの中を自由自在に往來せにやならぬ。雲門云、平地上死人無數、過得荆棘林一是好手ぢや。さア隻手音聲の公案を見たといふならば

お婆々死んでも何國へこざる

お婆さんが死んだら、どこへ行くか。云ふて見よ。お婆さんばかりぢやない。お前さんが死なしやつたら、どこへ行かざるかいの。

こめてたもれよ帆かけ船

品川沖に帆をかけた船が、通つて居るぞよ。この船を、即今何う止めるか。そりや飛行機が青山練兵場の上を飛んで居る。即今、この場で直ぐ止めて見よ。

四十九曲り細山路を、直ぐに通らにや一分たゝぬ

これや、何うして真直に通るか。さア通つて見よ。若しこれが通れぬくらゐなら、隻手音聲の荊棘林を通つたとは云はれぬぞ。

風の色香は何のよな物ぞ

「即ニ此見聞、非見聞、無餘聲色、可呈君ちや。色即是空、空即是色、これ位なことは、一昨日承知になつて居ないと何もならぬぞえ。

次ぎに夢中の祖師西來意

とは何うちや。醒めた時の祖師西來意と、夢中の祖師西來意と、是れ同か異が、祖師西來意と祖師北來意と是れ同か異か。祖師往來杜絕意は何うちや。

最後萬重の關鎖がござる

併しちや、何んな關鎖があらうが、其んな事にへこたれるなよ。一昨日蹴破つて來い。

之れが禪者のむなぶく病ぞ

富士山頂を踏破するでも、豪力は山の高いのに心を用ひぬ。唯だ一步、實地にゆるくと登るが、中々早い。それで疲勞た様子も見えず、餘裕がある。彼等には富士といふが別にないやうちや。それも一つことで、萬重の關鎖を「關鎖」とも病まず、縦横無礙に何處でも踏破するのが眞の禪者で、むなぶく病など、やむから「關鎖」といふものが別に出來るぢやわい。

關鎖なければ禪宗は絶える

「絶える」といはさるが、禪宗は元來限りあるものか。限り無いものか。釋迦如來が

華を拈じて以來の禪宗か、それ以前、即ち、過去久遠劫からの禪宗が絶えるやうに出来た禪宗か何うちや。さア能く看よ。何うちや。若しも絶える禪宗は出来てゐないと見たならば、禪宗はなくなりやせぬわいの。禪宗が絶えると思はさるのは、「關鎖」といふ、むなふく病に罹つて御座るからちやぞえ。こりや白隠さん、その病ひにこそ、還丹といふ薬を一粒のんで見さつしやれ。すぐなをるぞよ。ほんとちやぞ。嘘ぢやないぞ。

——矢張、その「出来た」と思ふと「なくなる」ぞよ。エーイツ。出来もせにや、なくもならぬぢやないかいの。ごこも彼處も禪宗だらけぢや。「白雲堆裏不見白雲、流水聲裏不聞流水」、唯だ正念相續をして居らぬから、此んなことになる。涅槃經云、麤言及輒語、皆歸第一義、曰中道、曰第一義、曰眞如、曰法性、皆是自性眞如一法也、とある。かう名が出ると、すぐ名に食ひつきまはる。「ものを轉すれば即ち如来に同じ」とあるやうに、そのもの／＼の主人公となれば自在ぢやが、直ぐと轉せら

れるから笑止ぢや。昔、支那の坊主で、鏡清和尚といふのが居た。雨の降る日、修行に來てゐる雲水に向つて、「門外これ什麼の聲ぞ」と問ふた。すると、此の雲水が、「雨滴聲」と云つた。そこで、鏡清は、「衆生顛倒して己れに迷ひて物を逐ふ」と云ふたさうちやが、實に自分に迷ひ、物を逐ふものが多いわいの。な、さうちやらう。アハ、

命かけても皆な透過せよ

透過せよと云はさるが、透過せうにも「關鎖」がないわいの。そんな障礙物がないから、千萬重の荆棘叢も平地ぢや。高い山も高きを失し、低い谷も低きを失す。それぢやによつて箱根の關所に差しかつたら、「曇らばくもれ箱根山、晴れたとて——。花のお江戸は見えはせぬ。アリヤエー、コリヤエー」ぢや。伊勢參宮と出かけたなら、「お伊勢ナア——。コリヤ——」。伊勢にや七度び、熊野にや三度び、愛宕山には月ま

主心お婆々粉引歌

あり。お杉お玉が弾く三味は、しまさん、こんさん、なかのりさん、ささの鉢巻さん、サ、ヤットコセ——」ちや。富士のお山へ登るなら、「六根清浄くくく」ちや。博多の仙崖さんは喃。雲助を一寸描いて、其の横にうまい讃をして御座る。「行脚中は關所とほれば又た關所、東海道は五十三次、馬の屁のかす」ちやと。アハ、ハ、ハ。「關所とほれば又た關所とは」關鎖を關鎖と病めば又た關鎖といふことちや。ごごもかしこも皆な關鎖ちや。關所ちや。「東海道は五十三次、馬の屁のかす」とは、關鎖を關鎖と病まねば、既に關鎖の相なしちや。その時はじめて何處も彼處もの關鎖が悉く馬の屁のかす。ブ、ラのブちや。と云ふほどのこと。よつく、この「馬の屁のかす」を味ふがよいわいの。何時までも其んな關鎖の病に罹つて居ると、飛んでもない本分はづれの迷道にはまり込んでしまふぞ。

むかし黄檗希運大禪師、常に嗟悼し惜しませ給ふ

昔、支那の黄檗希運禪師（臨濟禪師の御師匠）はなア、「今時の人は多知多解を得ようど欲して、廣く文義を求むるを修行となして居る。知らず、多知多解は翻つて壅塞となることを。たゞ多くの兒に酥乳を與へて喫せしむることを知つて、消と不消とを知らず。三乗學道の人、皆なこれ此の様である。悉く「食不消者」と名づく。知解も不消なれば皆な毒藥となる」と嘆いてござる。

扱ても牛頭山宗融大師、常に横説豎説はすれど、未だ向上の關鎖を知らぬ

牛頭山宗融大師とは喃、四祖道信大師に參じた人ちや。常に自由自在の辯舌を弄して、豎横十文字に法を説くけれど、未だく悲しいかな、佛祖不傳の無關鎖の關鎖を知らぬちや。千萬重の荆蕪叢を、自由自在に往來する通力が無い。喋舌ることばに冷暖自知の分が無い。併し、あれで趙州とか、慧忠國師のやうに行けるとよいが、駄目

まあ坐われ

二二六

ちやわい。一體、此のことは、宗融大師一人に止まらぬぞ。近頃になつて益々多い。まあ何んだらうと、彼方此方の御説教を聴いて廻つて見るがよいわい。自分で味はつたことを述べる者は極めて尠く、大概は澤山の書籍を讀んで、古人の淳妄想を記憶にといめ、あゝだ此うだと、あて推量をほざきまはつて居る者のみちやわいの。

關鎖なければ禪ちやない

元來「關鎖」といふものがあるか。若し有ると云へば、それは手づくりの「關鎖」ちやわい。其んな垣を勝手に構へて、これを透らにや禪でない云ふ。何んたる我儘な禪であらう。古人云く「生怨家ならば、相應の分あらん」と。悟らぬ前の人にこそ、日常の事物が關鎖となつて相應の分あるごうきともならうが、既に合點したら、月を指すの指で、用の無いものちや。用の無いものが、其處らをブラ／＼しては外聞が悪いちやないか。本分はづれちや。飛んでもない大間違ひちや。この徒の邪禪を「鑄型

禪」といふのちや。破有法王とか云ふやうな者が出て、相似禪評論を書く鑄型が直ぐこわれてしまつて、大騒ぎをやるちやらう。そんなことで仕うして達摩宗を擧揚し得られうぞ。わが向上禪に強ひて關鎖の名をつけやうとすれば、行住座臥、著衣喫飯、屙屎送尿、日常運爲の上に於て、本分上の疑ひが起つた時、そこを關鎖と云へば云へるまでちや。鑄型といふものが、ちつともない。關鎖が關鎖でない。百千萬の破有法王が出て來ても、つらのぞきさへもならぬ處ちや。

鯉魚も龍門萬重を越える、野狐も稻荷の鳥居はこすぞ

鯉でも、龍門の波ぐらゐは自由におごり超えて龍と化す。狐も稻荷の鳥居を一飛びに飛び超えて正一位になるといふ。

流石禪宗のめしやくいながら、關鎖ごほらにや一分立たぬ

況んや毎日々々勿體ない佛飯をいたいて居る禪宗坊主で、鯉や狐にも及ばぬものが澤山に居るぞ。鼠やいたちになるものが多い。石崖くやり、穴くやり、垣くやり、いたち禪、てん禪、むじな禪ぢや。本分上の關所を、關所とも病ます、鼻謠うたふて通る丈けの自由がなうては一分たつまい。まア能く考へてみさつしやれ。

疎山壽塔に牛窓櫺

「疎山壽塔」とは、昔、支那の撫州に、疎山の匡仁禪師といふ方が御座つた。禪師は綽名を「疎山の矮師寂」といふ。並はづれた小つぼけな方であつたと見えるぢや。書に出て居る身體はチビで中々のやりてぢや、曾て洞山良介禪師の處で修行中のこと、洞山禪師は一夜ひそかに雲巖禪師から授かつたところの「寶鏡三昧」「五位顯訣」「三種滲漏」等を曹山に密付してござると、チビの疎山和尚、こそくとやつて来て、机の下にもぐり込み、悉く盗み聽きして後、其場にヌツと現はれ出で、手を打つて大笑ひ

しながら、「洞山の禪は、袈の手に入つたわやい。アツハ、くくく」と。洞山は大に驚いて「法を盗むとは怪しからぬやつぢや。その罰で永く倒肩吐く病ひに罹るぢやらう」と云はさつたげながの。泥棒をやつてをいて其場に現はれ大笑したところ。ごは實に面白いちやないかいの。それから香嚴和尚の處に行くこと、一日、雲水が香嚴に向つて「諸聖を慕はず、己靈を重んぜざる時如何」と問ふ。嚴云く「萬機、休罷し、千聖携へず」と答へた。すると、チビの疎山が、座下に居つて、突然、「ゲエー」とへドを吐く聲をして「これ何んの言ひぞや」と叫んだ。香嚴、「阿誰ぢやい、そんな聲を出す者は」といふと、大衆が、「矮師寂で御座る」といふ。嚴云く「師寂、山僧を諾せざるのか」と聞いたので、疎山は大衆の中から出て「さうでござる」といふ。嚴云く「然らば、汝、試みにいふて見よ」。疎山「もし、それがしの法話が承りたいならば師資の禮をかへせよ」といふから、香嚴は直ちに座から下り、坐具を展べて三拜した。チビの疎山は得意氣に高座に就いて偈で問答をしたが何うも出來がよくない。嚴云く

「たとへ汝が左うべら〜喋舌つたところぢや、今後三十年の間はへど吐き病ひにかゝるぢやらう」と。果して、疎山は此の病ひにかゝり、二十七年目に漸く癒えた。然るに、疎山は「香嚴師兄が、袈に向つて三十年この病にかゝるといふた。未だ三ヶ年やらねばならぬ」といふて三年間といふもの、飯を食へ終ると、指を以て、咽喉の奥を抉つては「ゲロ〜〜」と吐いたといふ。面白い人ぢや。この疎山禪師が未だ存命して居らざるのに門人衆が壽塔を造つて進せうとて、その由を禪師に話すと、師曰く、「一體お前は、工夫に幾錢やらうとするか」、僧云く「はい、それは老師の御考へにしたがひまして」、師云く「うん、然らば、爲將三文と匠人一好上、三文丈けやつてよいとするか。爲下將二兩文と匠人一好上、一文だけやつてよいとするか、若しいひ得たならば、袈が爲めに壽塔を造れよ」と。これは一體どうしたものぢや。又「牛窓櫃」とは、昔、支那に五祖演禪師といふぞえらい和尚があつた。或日、皆の者に向つて云はれるには「譬如水牯牛過窓櫃頭角四蹄都過了、因甚麼尾巴過不得」、たと

へば、水牯牛が窓櫃を過ぐるに、頭角や四蹄は都てとほり過ぎて居るのに何によつて尾巴のみ、とほり過ぎることが出来ぬか。と問はれたが、大衆は啞然として唯だ一人返答する者が無かつたげな。併し此則でも「疎山の壽塔」を徹見したら、直ぐ看えねばならぬ。

乾峰三種に犀牛の扇子

「乾峰三種」とは「乾峰和尚上堂曰、法身有三種病二種光、須是一透過始解穩坐地、雲門出衆云、庵内人爲甚麼不知庵外事、峰呵々大笑、門云猶是學人疑處、峰云、子是什麼心行、門云也要和尚相委悉、峰云、直須恁麼穩密始解穩坐地、門云諾々」といふ古則ぢや。さア、雲門の法身とは何んなものぢや。それが不分明なら、三種病にかゝるぢよ。次に「犀牛の扇子」とは「碧巖集」の中にもあるが、鹽官といふ和尚が、侍者をよんで「侍者やい、そこから犀牛の扇子を持つて來い」といふ。侍者云く

「扇子は最う破れてしまひました」。和尚云く「扇子が既に破れたら、犀牛兒をかへしてくれ」といふと、侍者は大に困り果て、一語もなかつたとある。侍者に代つて此の則を看破せねばならぬのぢや。

白雲未在に南泉遷化

「白雲未在」とは、「白雲端禪師語ニ五祖演曰、有數禪客自廬山來、皆有悟入處、教伊說亦得有來由、舉因緣問伊亦明得、教伊下語亦下得、祇是未在」といふ則で、即ち、説法ぢやとか、拈古ぢやとか、下語などが自在に出來ても、この白雲は未在／＼ぢや。といふて居る。實にはや此場に於ける白雲は。たとへ三世の諸佛が出來て來やうが、歷代の祖師が出來て來やうが、何が來やうかがにが來やうが、總に未在／＼ぢや。それから「南泉遷化」とはのう「長沙岑禪師因三聖令秀首座問云、南泉遷化向甚麼處去、師云石頭爲沙彌時曾見六祖秀云不問爲沙彌時上南泉遷化

向甚麼處去、師云教伊尋思去、秀云和尚雖有千尺寒松且無抽條石筍、師默然、秀回舉似三聖、聖云若實與麼勝臨濟七步、雖然如是待我明日更看過、至明日乃問、承聞和尚昨日答南泉遷化一則話可謂光前絕後今古罕聞、師亦默然、といふ則ぢや。南泉は遷化して何處へ向つて去るか。遷化が遷化ではない。直ちに遷化たることを失はず。コレ侍者やい。侍者は居ないか。何處へ行つた。ナニ裏の畑の草とりに出かけたのかい。衲はお茶が一杯欲しいわいの。

倩女離魂に婆子燒庵よ

「倩女離魂」とは、「五祖問僧曰、倩女離魂那箇是真底」といふ則ぢや。此の倩女の因縁は、「正燈錄」や「剪燈新話」や「太平廣記」などに出て居る。支那の衝陽といふ處に、張鑑といふ人が居つた。この人の娘に倩女といふて、まことに端顏絶倫の美女と、甥に王宙といふ美男子があつた。ある時、張鑑は、王宙に向つて「宙や、倩女が大き

くなつたら、お前の嫁に貰つてくれ」と戯れにいふた。倩女は、成人するにつれて、大層立派な美人になりをつたので、彼方此方から頻りと縁談を申込んで来る。そのうち、或る顯位の人から所望されて、張鑑は遂ひに倩女を其人にやることゝした。倩女は、それを聴くと「妾の夫は王宙と定めて置きながら、今更、他人にやらうとは、何んといふ情けの無い御父上であらうか」と悲しんで居ると、一方、王宙も叔父の不都合を恨み、遂ひに都へ赴かうと決心し、深夜船に乗つて數里ばかり行くと、岸の上から船を追うて来る者がある。見ると、倩女であつたので、王宙は夢かと思はれ、喜び直様船に迎へて、蜀の國へ遁れ、二人の子兒まで擧げて睦しく暮してゐた。二人は遁げて五年目のある日、故郷へ歸つて父母に謝し、晴れて夫婦にならうと相談し、又、舟に乗つて衡陽に引返し、王宙は、倩女を船にのこして置いて、一歩先に家に歸り、叔父の張鑑に對面して倩女と共に不義の出奔をした罪を謝すと、張鑑は吃驚して「倩女はお前が家出して以來、病氣になつて唯今でも、奥の間に臥して居る。何うもおか

しな話ではないか」といふと、王宙は「いえ、倩女は、唯今、船の中に居ります」といふ。張鑑は、兎も角、召使ひの者に命じて一應船の様子をうかがはせると果して居るといふこと。愈よ不思議に思つて、此由を病褥に臥して居る倩女に話すと、倩女は喜んで起き上り、莞爾り笑ふて少しも言はず、室を出で、船から歸つて來た倩女を迎へると、二つの形は忽ちピッタリと合して一體になつた。といふ話である。即今、家に居た倩女が、ほんどのものか、蜀の國から歸つて來た倩女が、ほんどのものか。こゝが向上の大事な場ぢや。次ぎに「婆子焼庵」とは、これも支那のある婆さんが、一人の坊主に庵を建て、與へ、十二年も供養して居た。いつも二八ばかりの綺麗な娘をして御飯の給仕や、身のまはりの用事をさせて居た。ある日、婆さんは娘にいひふくめて、坊主を抱かじめ、「かうした時は何うですか」と問はしめたところが、坊主は「古木倚寒巖、三冬無暖氣」と答へて對手にしなかつた。娘は此の由を婆さんに告げると、婆さんは色を爲して「エーツ、わしは二十年も、此の俗僧に供養したかい」と

云ふて、遂ひに其の坊主を逐ひ出し、住庵も焼いてしまつたといふことぢや。

是れぞ法窟の爪牙と名づけ、又は奪命の神符とも云ふ

以上に列記した種々の古則を、大法窟の獅子とも、象とも、守護神とも名づけ、又は、いのち奪ひの御符ともいふ。とあるが、拍樹爺はおかしうて堪らぬわいの。そんなものを御符にしたり、守護神にたのむやうでは、遠うして遠しぢや。つまり見性が十分でないから、そんな古則を、神符とか、爪牙とか云ふて、大層がるやうになるのぢや。

今日、埒があかねば明日を待ち、明日埒があかねば明後日、「隻手無聲の音聲」を看破つたといふものでも、見性成佛せぬから、大歡喜がないから、「疎山の壽塔」だの、「婆子焼庵」だのいふやうな古則を關鎖として病むのだ。そんな月日をたのむ梯子悟が何んの役に立つか、梯子悟りをするなら、お經本を讀む方がよいわい。

此等逐一透過の後に、廣く内典外典を探り

仰しやる迄もなく、法門無量誓願學は勿論のことぢやわいの。そりや、もう、過去久遠劫より盡未來際に至るまで四弘誓願ぢや。いつがはじめ、いつが終りといふことは無いぞや。古則公案を逐一透過した後でないど内典外典を融通し得られぬやうな、不自由なる手の内では、何んの役にも立たぬわい。唯だ徹底見性すりや能所終る。隻手でも、無字でも、一則徹見したら、直に自分の力量で「三玄三要」でも、「五位」「十重禁」等見えて居なけりやならぬ。若しも、それが見えぬといふ者があつたら、此の柏樹爺が證據に立つぞ。

無量の法財集めて置いて、二つの根機を救はにやならぬ、三つの根機の其中々に、眞の種草を求むるがをも

三つの根機を救はにやならぬと言はさるが、人々皆な大根機をもつて居る。それを師表に立つ者が、自分の鑄型にはめようとして勝手に小根機をつくるのぢや。白隠下の醉翁和尚は修行中でも一週間に一度ぐらゐしか入室しなかつたげな。すると、皆なものか、和尚の悪口をほざくと白隠さんは「彼の男は汝たちのうかいひ得られる人物では無いわい」と言はれたさうぢや。果して彼んな巨大なる人物となられたのぢや。まア、なんだらうと徹底見性した人物は此んなものぢや。見性せぬ者は一超直入とは云はぬ。見性の他には何も無い。古來、禪堂では筆硯の類を嚴禁して居るが、なアニ、見性のためなら筆硯でも紙でも何んでも携へて入室するがよい。大歡喜が起るまでは突撃猛進のみぢや。昔、雲門の如き峻峻な和尚でも、「筆硯をもち來れ」といふて居るぞ。一大事は唯だ徹底見性ばかりだ。それと今ま一は、時勢と、人物とを見て、それに適した法を取つてまわさねば嘘ぢやわい。今日の如き代には、既に白隠さんの禪風が古くなつて居る。各師家共に大に注意すべき事ぢや。

眞の種草が眞實欲しか、法窟の牙と奪命の符と、鳥の兩羽を挾むが如く、是れがなければ種草は出來ぬ

此の四くだりの意は、「眞に佛祖のあとつぎが欲しくあるならば、前にも言ふた法窟の爪牙と奪命の神符とを、宛然鳥の兩翼を挾むが如くでない」と駄目ぢやと「いふにあゝ。甚た學人鉗錐の考へが違つてをるぢや。何故、法窟の爪牙と奪命の神符ととか云ふやうなゴタ／＼した公案を昇ぎまはらさるか。最初、學人をして見性をさせる時、十分の「冷暖自知」をさせず、未だ「肯心自許」せぬのに、早くも「見性」したものと見あやまつて、接得するから、學人に「えらい大決定の分がござらぬ。いつまで経つても偽せものだ。ぢやによつて「眞」の種草だの、「偽」の種草だのが出來るわいの。徹底見性の前には、關鎖もなければ無關鎖もない。百千萬の法窟の爪牙、億兆の奪命の神符を透過するよりも、唯だ此の「徹底見性」するに如かずぢやわい。

是れが即ち佛國の因、ごりも直さず菩薩の不行

かうして出来た種草は、實に佛國土の成り立つ大原因であるわいな。言葉をかへて云ふと、これが謂ゆる菩薩の不行ぢや、修、證不二の場ぢや。

たごひ虚空は盡きやろご儘よ、こちの弘願は果しやない

盡きるは滅ぢや。滅がまゝなら、生ずるもまゝよぢや。弘誓願は、はても限りも無い。此場にいたつては、此方も無ければ、其方も無い。弘願のさかひは更にない。

頼み入るぞよ千歳の後も、ひごりなりごも當家の種草

おたのみ申すは外でも御座らぬ。無量盡點劫以前より、無量盡點劫以後まで、何うか達摩家に立派な子孫を拵へておくれやれ。

姿々が心を能く参究せば、祖師の眞風は地におちやせまい

此の自分の主心お婆さんの心を、よくよく参究しつくして御覽なされ。「己れ」といふ、かまへが無いわいの。若しも「自己」があつたなら「向ふ」が出来る。佛法といふ「向ふ」が出来、佛道を成じたといふ「自己」が此方出来る。濟度するといふ「自己」と、濟度されるといふ「向ふ」が出来る。そこで「己れ」といふ構へを取り去つたなら、能所のあと方も御座らぬ。自力々他同時になる。然るに、今時の者が師家になると、師家になつたきりぢや。自力々他同時の端的を十分に發揮する者が少い。熱が無い。「我れ若し地獄に墮せずんば、いかでか汝が地獄に墮したるを救ひ得ん」。一番、火になつて自力々他の端的を發揮してみさつしやれ。佛はいつも修行の仕通して御座るぞえ。かうしたら達摩宗の眞風は地にも落ちなきや、天にも上らぬ。そりや又なせぢや。上にも下にもあらざる處なし。くうとしてとほらざる事なく、げきとして

とほらざる事なしぢやもの。若しも、かうで無いならば、師家とは申されぬぞ。

儒者でさへもナ、「故君子之道、本諸身、徴諸庶民、考諸三王而不謬、建諸天地而不悖、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人而不惑、知人也、是故君子、動世爲天下道、行而世爲天下法、言而世爲天下則、遠之則有望、近之則不厭、」と言ふとる。何うちやいの、むまいことを言ふとるぢやないか。聖人が出て来やうが、鬼神が出て来やうが、惑ひも疑ひも無く、大法をひつかついで、天下の直唯中に立ち、人天を濟度せにやならぬ。それぢやに依つて、大導師たるものは、一舉手、一投足、揚眉瞬目、くさめ一つしても、天下の則とならねば駄目ぢやぞや。これほどの通力が無いと、お師家さんは皆んな偽ものぢや。

通力と云やア、儒者の方では「素而行」といふことぢや。見さつしやれ、「君子素其位而行、不願乎其外、素富貴、行富貴、素貧賤、行貧賤、素夷狄、行夷狄、素難患、行乎患難、君子無入不自得焉、」とあるぞよ。これを十分に味はふて御自分の

身に照らして見るがよいわいの。

油断めさるなおまめで御座れ、婆々は是れから御暇申す

行きたけれや、何處へなりと勝手にうせるがよいわい。ハツハツハ、、、。まづ、此の位にして置くかの。

大正九年三月五日印刷
大正九年三月十日發行

著作
所
有

著者

發行人

印刷者

印刷所

定價金壹圓五拾錢

高津柏樹

東京市京橋區南八丁堀一丁目四番地
日本圖書出版株式會社取締役社長

小西榮三郎
東京市麴町區有樂町二丁目一番地

吉原良三
東京市麴町區有樂町二丁目一番地

報文社

東京市京橋區南八丁堀一丁目四番地

日本圖書出版株式會社

電話京橋(二)四二〇三番
撥替東京(一)二八〇三番

發行所

392
83

13.6.13

終

